歳時世相篇

⑨

【12月の犠牲祭】

動物たちの受難

新免 光比呂（しんめん みつひろ）
本館民族文化研究部

クリスマスのブタ

クリスマスを間近に控えた一二月、ルーマニアの多くの村々ではブタの悲しげな鳴声が響き渡る。春の市場で手にいれ、ほぼ一年間、手塩にかけて育てたブタを食用に屠殺（とさつ）する季節がやってきたのだ。

冬の朝は寒い。しかし、ブタは運命を予感するのか、農家の主人と手伝いの人が近づくと悲しげな声をあげて逃げまどう。数人で大汗をかきながらブタの巨体を押さえつけ足をしばり、そして喉を掻き切る。

次に毛を焼く作業が始まる。これには二通りの方法がある。藁（わら）で大きな火をおこし、そのなかでいっぺんに毛を焼いてしまう。あるいは、火を噴く手回しのふいごを用いる。これで丹念に毛を焼いていく。

それが終わると、ブタを頭から尾まで真っ二つに両断する。ここで作業を見守る子どもとネコにご褒美である。尻尾と耳を切り取り、かじるのだ。火であぶられた軟骨は、こりこりとして意外に美味しい。あとは、ブタの巨体をなにひとつ無駄にすることなく丹念に解体していく。皮をはぎ、肉を切り出す。内臓を取り出し、よく洗う。腸はきれいに洗って、ソーセージの皮にする。そして骨や皮から肉をそぎ落としてソーセージのなかにつめるミンチをつくる。できあがったら、農家の屋根裏につるし、台所のかまどから出る煙でスモークする。

すべての作業が終了するのは、お昼過ぎである。これでクリスマスの御馳走の材料はそろった。あとはケーキを焼き、大掃除をして聖なる救世主の降誕日を迎えるばかりとなる。このブタを冬に屠殺する習慣は、同じ東ヨーロッパの隣国セルビアなどでも盛んである。

犠牲祭とヒツジ

一方、ムスリム住民の多い諸国では、年によっては冬にヒツジが受難の時を迎える。イスラーム暦（ヒジュラ暦）の一二月一〇日から四日間にわたっておこなわれるイード・アル＝アドハー（犠牲祭）である。犠牲祭の日時はイスラーム暦が太陰暦であるために、現代のヨーロッパ暦（グレゴリウス暦）では毎年一〇日ほど日がずれて一定しない。この日は世界中のムスリムによるメッカへの巡礼の最後を締めくくり、アブラハムが息子をアッラーへの犠牲として捧げた事を記念する。おそらく世界中で何万匹ものヒツジが、あえない最期を遂げる。

トルコのコンヤという都市で、かつて犠牲祭を迎えたことがある。犠牲祭そのものは旅行者がかかわるものではなく知らぬ間に終わっていたが、驚いたのはその翌日である。街角のあちらこちらに、ヒツジの頭と皮の山ができている。殺されたヒツジの数を想像させる膨大な量だ。

犠牲祭は、当然のことながらムスリムの暮らす地方ならどこでもおこなわれる。イスタンブルの街の片隅に、古都にふさわしくない一群のヒツジを見つけることもある。また、コンヤでの話だが、路上でふっと空を見上げたときに、二階のバルコニーでヒツジを解体しているのを見たこともある。まさに庶民の生活空間に根付いた行事なのだ。

老人と羊皮の山。どのようにして集められ、どこへいくのか

家畜文化と宗教

ヒツジやブタなどの家畜動物を屠（ほふ）る人びとを見ると、キリスト教もイスラームも動物の屠殺という点で同じ性格をもつことを実感する。日本のような農民社会では想像できない家畜とのつきあい方だ。

アブラハムによる供犠の物語は、旧約聖書「創世記」の一節に感動的に描かれている。アブラハムが神の命令により、息子を生贄（にえ）に捧げようとする。わが子の首にまさに刃をあてようとしたとき、神はいう。おまえの信仰は証しされた。息子の代わりにヤギを屠るがよい、と。これが身代わりの犠牲（贖罪（しょくざい）の犠牲）の始まりである。

大切なものを捧げるという点では、ほとんどすべての宗教は共通している。喜捨であれ、お布施であれ、わが身の一部を捧げ信仰をあらわす行為だからである。ただし、動物供犠というのは、さすがに生々しい。

動物供犠に関する研究は、ヨーロッパの民族学のなかでも古くからある。もともとキリスト教徒の供犠への関心は深い。イエス自体が贖罪の生贄としての性格をもつからであろう。つまり、十字架上の死によって罪深き人間と神との和解を実現したとみなされるということだ。

いずれのお祭りも、その先行きにEU加盟が暗雲をなげかけている。ルーマニアもトルコもEU加盟を念願し、コペンハーゲン基準といわれる加盟基準の遵守に努めてきた。政治的基準、経済的基準、EU法の総体の受容を骨子とする。さらにアキ・コミュノテール（EU加盟国が基本条約に基づいて積み上げてきた法体系の総体）も遵守しなければならない。これらの基準は、ヨーロッパとは何かという定義ともかかわる。

そこから生じた、事実上、西ヨーロッパを標準とする圧力のもとでは、あからさまな動物の屠殺ということが、動物愛護の観点からも、血なまぐさく不衛生という点からも好ましくないのだ。すでに加盟している国々でも、手作りチーズすら不衛生だと問題になった。したがって、EU加盟を熱望するトルコでは公共の場で屠殺をしないようにと指導されているらしい。めでたくEUに加盟したルーマニアでも、よき加盟国メンバーとしてふるまうためには配慮が必要とされる。おそらく、西ヨーロッパ標準のもとでは、家畜は動物愛護の精神をもって苦痛なく合理的に屠殺されるべきなのだ。それが神から自然界の管理者としての特権的な立場を与えられたと信じるキリスト教徒の優しさなのだろう。

キリスト教のミサ（聖餐式）では、パンとワインをイエスの肉と血とみなし、それによってイエスの身体を象徴的に食する。またスペインなどの教会に描かれたイエスは、槍に貫かれた傷と十字架に足を打ち付けた釘による傷から出た血にそまり苦悩に満ちている。動物の屠殺（供犠）を通して、なかなかに複雑な家畜文化と宗教のつながりが見えてくる。